

児童養護施設職員による長期的意味づけから捉える自立支援の展望

高橋菜穂子

1 児童養護施設における自立支援

児童養護施設に入所している子ども(以下、施設児童)にとって、施設を退所し自立することは、一般家庭の子どものように小さなステップの積み重ねからなるものではなく、急激に強いられる不可抗力的なものである。しかし、彼らが、意欲のかつ計画的に将来を見据えるためには、自尊感情の回復や他者への信頼感の構築など、さまざまな課題があり(林, 2004), 短期的な支援では達成できない。

そのような状況の中で、先行研究では、支援体制の不足と、それによる施設出身者の悲惨な成り行きを論じるものが多い(Bichal, Clayden, Stein & Wade, 1995; Stein, 2006; Dixon, 2008)。しかし、どのような支援が施設児童の退所後の最善の生活と結びつくのかという点はあまり明らかにされていない。そのため、現場で蓄積されている実践を体系的に整理することや、そこから新たな支援展開に向けた提言を行うことが求められる。

施設における自立支援は、子どもの入所期間中に、自立に必要な援助を行うリービングケアと、退所した子どもに対して行うフォローアップを指すアフターケアが定義的に区別されているが、本来なら、リービングケアからアフターケアへとつながる一貫した援助が必要であることは言うまでもない。施設に置ける自立支援は、単に子どもが施設を退所する短期的な移行期間に焦点をあてたものではなく、施設に入所している期間から始まり、施設を出た後、退所者が真に心理的・社会的な安定を築くことができるまでを見据えた、長期的な想定のもとに実践される支援を指すものである。

しかし、リービングケアからアフターケアへとつながる一貫した支援の全体像を、長期的な視野から論じた先行研究は少なく、それぞれの時期に応じた支援を分解したり分類しながら個別に論じるものが多い。そ

のため、上記のような長期的な支援のありようを、現場で蓄積されている実践から体系的に整理することや、そこから新たな支援展開に向けた提言を行うことが求められる。

そのように考えた時、自立支援を担う職員の視点から、リービングケアからアフターケアを貫く長期的な時間軸に根ざして実践の意味づけと展望を明らかにすることは、今後の自立支援の充実に向けて意義をもつだろう。

2 本研究のアプローチ

本稿では、ある児童養護施設職員が行っている自立支援の実践を、リービングケア、アフターケアを通じた長期的な時間軸に沿って検討する。本稿は、高橋(2012)で検討した年長児童への自立支援の事例研究と、そこで提起された問題に着想を得ており、そこから支援の充実に向けた具体的提言を行うことを目指すものである。そのため、本研究では再度同一のインタビューデータに立ち戻り、語りにもられる自立支援への意味づけと展望を包括的に描き出し、今後の自立支援への提言を行った。

1人の職員の語りを扱うことについて、本研究が実践に対していかなる貢献が可能か、方法論的意義を述べたい。本研究のテーマである児童養護施設における自立支援は、冒頭で述べたような社会問題への問題意識の高まりから、その解決に向けた理念や理想論が先行している。一方で、自立支援の核となる、施設での日々の実践が、その主体である職員の視点から現実にそった形でとらえられたものは少ない。1人の職員の語りを深く掘り下げることは、実践を、職員にとってリアリティのある形で経験的に把握することを可能にし、彼らが現場で生きてきた長期的な時間軸に根ざし

ながら検討することが出来る。そのため、実践への示唆が多く、問題解決において有効であると考え。

4 方法

(1) インタビュー協力施設とインタビュー協力者

今回インタビューを依頼したのは、大舎制児童養護施設 B 園である。B 園は保護定員 60 名、職員 21 名で、大舎制施設 3 棟のほか、地域小規模グループホームを設置し、より家庭的な雰囲気に近い支援を行っている。インタビュー協力者は D 先生(女性、インタビュー当時 47 歳、勤続年数 27 年)である。現在 B 園に併設されたグループホームで、10 名ほどの子どもを 3 名の職員で担当している。以前筆者は、別の研究で 1 度インタビューを行っており、その際、長年の勤務経験から、年長児童への自立支援の実践を詳細に語ってくださった。経験に裏打ちされた D 先生の言葉は、自立支援を考える上で、筆者にとって実り多いものであった。今回、再度そこで語られた事例の経過を聞くためインタビューを依頼した。なお、研究目的及びインタビューガイドが異なるため、1 度目のインタビューデータはここでは分析対象とはしないが、1 度目のインタビューで得られた語りも本研究の知見に影響している。

(2) インタビュー手続き

研究目的に沿ってインタビューガイドを作成した。質問項目は、前回のインタビューで語られた年長児童の事例についての経過を聞くものと、自立支援の実践全般について広くそのありようを聞くもの(例えば、退所を見通して支援にあたるなかで、どういったことに一番難しさを感じたか、など)によって構成した。このガイドに基づき 200X 年 9 月に半構造化インタビューを行った。インタビューの合計時間は 1 時間 55 分であり、インタビュー協力者と施設長の許可を得て IC レコーダーに内容を録音した。守秘義務に関して十分に配慮し、個人名はテープ起こしの段階でアルファベットによる仮名表記にした。個人情報を含む語りについては、個人の特定を避けるため、語りの本質に影響しない程度に改変した。

(3) 分析方法

分析は、KJ 法(川喜田, 1967)および、やまだ(2003)

に準じた。まず、インタビューで得られた語りを一文ずつ区切り、それを印字したカードをばらばらに並べる。互いに親近感を感じるカードを 1 カ所にまとめ、2 ~ 3 個ずつカードから成の下位グループに編成した。全体の 3 分の 2 程度がまとまったら、それぞれの低位グループについて、そこにまとめられた語りのエッセンスを表す「一行見出し」をつけた。ここで重要なことは、過度に抽象化しすぎないこと(川喜田, 1967)である。発言者の語ろうとしている要点のエッセンスをできるだけ柔らかい言葉で書き留めていくことに KJ 法の独自性がある。次にその「見出し」を眺め、再び「似ている」と「感じる」ものをまとめることを繰り返し、最終的に 4 つの上位グループにまとめた。各グループは、「子どもの主体性を引き出す関係基盤」、「語りによるライフイメージの転換」、「持続可能な社会資源としての足場作り」、「施設外部との関係」である。最後に個々のグループの図解化を行い、その意味連関を総合的に素描した。これにより、実践に関するいくつかの視点を、まとまりのある意味の関係性として包括することが分析の狙いである。

5 結果—職員の語りにもみる自立支援の長期的意味づけ

図 1 に、語りから立ち現れた D 先生の支援の展望を素描した KJ 法の図解を示した。図 1 は、大きな時間軸として、左から右へと向かっている。そして、上位グループ I, II はリービングケアに関わる実践であり、上位グループ III はアフターケアに関わる実践である。そして、その双方に上位グループ IV が影響を及ぼしている。上位グループ I, II は、施設にいる間に行われている実践であり、「主体性を引き出す関係基盤」、「語りによるライフイメージの転換」として、関係基盤を軸に、語りを用いて過去の整理や将来展望の生成が支えられていた。上位グループ III は、「持続可能な社会資源としての足場作り」として、アフターケアと、アフターケアに向かうための望ましい退所の形などについて述べられたグループである。最後に、上位グループ IV では、リービングケア、アフターケアの双方に影響を与える施設外部との関係について、家族との関係と、行政機関との連携の 2 つの視点から述べられたものである。

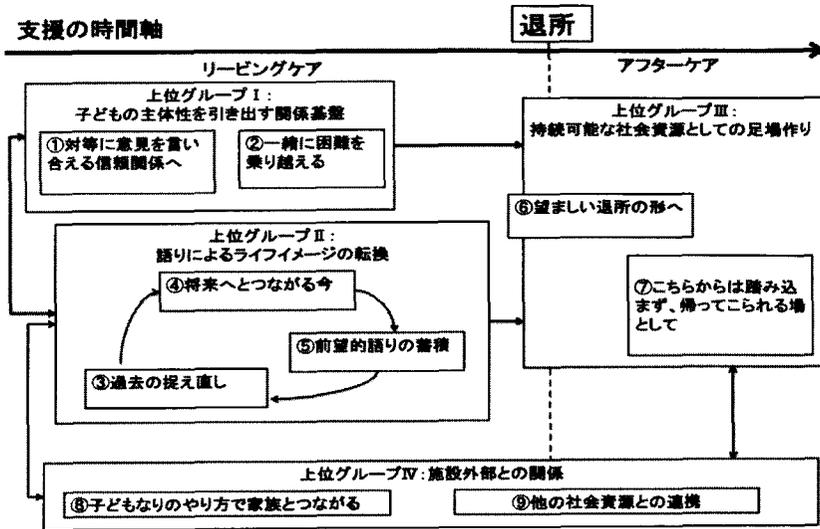


図1 D先生の語りからとらえる自立支援

(1)上位グループⅠ：子どもの主体性を引き出す関係基盤

このグループは、自立支援の基礎となる、職員と子どもの関係性について言及された語りで構成されている。村井(2002)は、自立支援とは、相手の主体性の保証を行うことであると述べる。支援者と子どもの間で信頼関係を築き、「心の安全基地」を作る中で、子どもが決断するのを「待ち」、その決断を「尊重」し、そして相手が失敗を通して学び成長することを「見守る」ことが必要であるという。ここでは、一方的でパターナリスティックな支援ではなく、子どもの主体性へとつながる信頼関係を築く必要とされており、北川(2010)は、そこにはソーシャルワークにおける支援者と利用者の「協働性」が必要であると指摘する。D先生の実践においても、協働的な関係性を基盤に子どもの主体性を尊重しようとする姿勢が、現場のリアリティを伴って語られた。

①対等に意見を言い合える信頼関係へ

D先生は、子どもが自立へ向かうために、まず職員と子どもの間に信頼関係を築き、その上で一緒に苦しいことを乗り越え自立への具体的な実践を積み重ねようと展望している。

D先生が築こうとする信頼関係とは、D先生の思う

通りに子どもが従ってくれるような関係ではなく、対等な立場で言いたいことを言い合えるような関係性である。そのような関係を築けていれば、意見が食い違い、ぶつかった時でも、力強く職員が意見を通すことや、子どもが自分の意見を抑圧することにはならず、食い違いから新たに関係を築いていくことが出来る。D先生がこのような対等な関係の必要性を述べる背景には、指導的で一方的な関係では、子どもに職員の気持ちを伝えることすら難しくなってしまうという経験がある。「『あかんことはあかん』って言うのが、やっぱり関係ができていないので、やっぱり(子どもに)入らない。言ってるのがほんまに説教ばかりみたいな感じで、『もううるさい』とか」と語るように、いくら職員が働きかけても子どもに伝わらず、一方的な説教ばかりになってしまう。そのような関係性では、職員は子どものニーズに応じた支援を展開しにくい。その結果、「(職員が)焦ってるのが、出てしまうんです、どうしても。言葉にでたり、態度にも出たり、でもその子にしたら、もうそれがうっとうしい。どうしても空回りしてしまう」というように、職員の思いと子どもの受け止め方の間にギャップは、自立支援の展開における根本的な障害となる。

そもそも、自立支援では、職員が先々を見通して、子どもにあらかじめさまざまな課題を課してしまうこ

とが起こりがちである。しかし、子どもの側にそれに応じるモチベーションがなければ両者の食い違いは埋まらない。それどころか、子どもにとって職員は口うるさい存在としてよりいっそう関係を悪化させてしまう。よって、自立支援の過程では、子どもが主体的に将来に向けた課題を設定し、自ら行動していくような過程を重視する必要がある。そのためには、様々な課題を子どもに押し付けるのではなく、「待つ」、「見守る」という実践も重要である。そして、子どもと職員との間に指導的な関わりを越えて対等に話し合える関係を築き、持続的な協働へ向かう必要がある。

②一緒に困難を乗り越える

上記のような関係性築いたうえで、D先生は、子どもにとってつらい事があっても、職員と一緒に乗り越えて行こうというメッセージを発信する。離れて暮らす家族への葛藤や、施設での居場所のなさを抱えているとしても、目の前の職員と信頼関係を築き、自立に向かうための道筋を一緒に展望しようとしている。D先生はインタビューで繰り返し、「一緒にやっぺいこう」、「一緒に乗り越えて行こう」と子どもに語りかける様子を振り返った。「精神的なところで、なにかあった時に乗り越えられるっていうのが(必要)。やっぺい(施設を)出たら一人なので。そこを乗り越えられる力っていうのがやっぺいついてほしい。少々のことではへこたれてほしくないし、つらいことがあっても乗り越えられるっていう。でも人間は一人では生きていけないので、誰かに支えられて」と語り、あくまでも子どもが自分で課題を乗り越える力をつけることを重視しながらも、子どもたちが本当につらいことがあった時、それを支えられる存在であろうとする様子が見られる。

自立していく過程では、子どもが自ら課題を設定し、それを主体的に克服していく必要がある。そのため、自立支援計画の策定その実践過程においては、子どもの意見を積極的に取り入れることが必要であり、職員はそれを協働で支える役割を担うべきである。そのために、子どもが主体的に課題を克服していけるだけの十分な情報提供を行い、アクセス可能な社会資源を提示するといった支援が必要である。

(2)上位グループⅡ：語りによるライフイメージの転換

このグループでは、子どもが自分の過去を受け止め、現在の生と向き合い、将来のイメージを展望するという過程を、職員が語りを通して支える実践がみられた。児童養護施設における実践動向では、客観的アセスメントに基づく自立支援計画の作成と実践と、社会構成主義に基づくナラティブ・モデルに代表される当事者の語りを尊重した実践という二つの方向性を見出すことができる(林, 2004)。実在概念から関係概念へと向かう大きな認識論的転回に基づくナラティブ・モデルは、社会において自明視されてきた「問題」の実在そのものを疑い、福祉実践の目標を、個人の適応や社会の改良から、新たな言語と意味の創造へと転回するとも言われる(野口, 2005)。

語りは、過去の体験を再構成することだけでなく、現在の生や未来への展望を主体的に組み替えることをも可能にするため、人生を貫くライフイメージの語りが包括的に扱われるようになってきている(やまだ, 2000)。Jansen と Andenæs(2011)は、施設児童が生き生きとした将来を思い描き語ることに伴って、新たに過去や現在に対する意味づけが転換され、主体性が生成される様子を報告している。このように、人は語りによって過去・現在・未来というライフイメージを循環的に絶えず再構成していくものであり、そのような語りは、ネガティブな意味づけをポジティブに変える力を発揮する。このような語りを引き出す実践は、児童養護の支援においても取り入れられており、ここでは、より具体的な事例の中で、子どもの語りを引き出す実践のありようが浮かび上がった。

③過去の捉え直し

子どもが主体的に将来と向き合うことができるかどうかは、子どもが生い立ちをどう捉え、現在の自分の状況をどのように受け止めているのかということに影響を受ける。D先生は、子どもが親を恨むだけの段階にとどまり、すべてを親のせいにしてしまう時には、主体的に自分の人生を切り開こうとする気持ちが持たず、日常生活のすべてにおいて不安定になってしまうと語る。インタビューでは、退所まで親との関係が修復されず、親への否定的な気持ちを持ち続けたため、就職等の具体的な話し合いがうまくいかなかったという年長児童の事例が語られた。だからこそ、D先生は、

子ども達が「自分がなぜここ（施設）にいるのか」ということを自分なりに解釈し、受け止めることが必要であると強調する。過去の捉え直しは、親との関係や葛藤を超えて、子どもが「自分でがんばっていかねば」という気持ちへ向かうことを可能にするとD先生は考えている。そして、現状を受け止め、自分で頑張っていこうというプロセスにおいて、職員がその子どもを支えるという関係が目指されている。

「Life Story Work (Ryan & Walker, 2007)」²⁾のような体系化されたプログラムを参考にしながら、日常的な実践へも援用し、日常における何気ない会話の中でもこれらに配慮した関わりを行っていく必要がある。

④将来へとつながる今

現在の施設での生活は、将来の子どもの生活とのつながりにおいて捉えたとき、これまでと異なる側面が見えてくることがある。例えば、D先生は、施設での食事場面の子どもとのやり取りについて、次のように語った。「今はきちんと栄養士さんが考えて作ってくれてるんやから。まあ、嫌いなものがあったも当たり前っていうか、しょうがないって思う。だから、(子どもに)『減らしてあげるから、食べられる分は食べ』って。『でも、これから先、一人で暮らすようになったら、まあそこへんは自分で考えられるやろ』とか言って」というように、いずれ子どもが一人で生活することを見越して、そのような状況を想定させている。たとえ何気ない食事の場面も、将来につながる糧として受け入れることにつながるかもしれない。

さらに、施設を退所した子どもたちが施設を訪れた際に、職員の「口うるさい」指導のありがたさを感じてくれたというエピソードを語っている。「ここを出た子からね、『あの時は先生うるさいうるさいって思ったけど、やっぱり、よかったわ』みたいな。今は笑って話せるみたいだね。だから、やっぱりその時にはどれだけ言っても無理なんかなあとか思ったり、でも後でそうやって、失敗したけども、後でわかって、もう一回やり直そうって思える子もいるので、それはそれで、いいのかなって思ったり。」と語る。このことから、D先生は、現在の子どもたちとの関わりについて、時には口うるさく指導することも、将来を見通した長期的な視点に立ったときに必要であると感じている。このように、これまで関わってきた多数の子

どものエピソードや関係性が、D先生の現在の実践への意味づけを支えていることが分かる。

⑤前望的語りの積み重ね

思春期の発達において、若者は「自分が何になるのか」という期待によって特徴づけられ、また社会的にもそのような将来に対する計画を抱くことを期待される。生き生きとした将来展望は、若者に生きる活力を与え、「いま・ここ」の人生を豊かなものにする。Jansen と Andenaes(2011) は、若者が語りを通して将来を展望することを「前望的語り(Prospective Narrative)」と呼び、それは現在や過去に対する認識をも新しいものにする力を持っていると述べる。前望的語りは、自分が誰なのかという問いへの理解を提供し、自分が何になるのか、またどのような可能性を持っているのかについて照らし出すため、思春期の発達において非常に重要である。

D先生は、このような前望的語りを引き出す実践として以下のようなエピソードを語った。担当している中学生の女の子がおたふく風に罹った時の語りかけの場面である。「つい先日まで、(女の子が)おたふく風邪でね、一週間寝込んでたんです。その時もイライラして、痛さと、おなか減るけど食べられへんのと、学校に行きたいので、涙ぼろぼろ流して。その時に、『あんたが将来お母さんになったら、言えるよな』って。『お母さんの時はすごいい痛かったん、とか、ものすごい腫れてんとか、子どもにちゃんとと言えるよな』って話をしたら、『そうやー』って。『痛いから、こんなんは食べられへんとかわかるから、それができる』って。『やっぱり自分が経験しなかったらわからへんことってあるよな』とか」。やまだ(2000)は、物語の機能について、「変えられない過去の事実を納得させる方法であるとともに、自己の志向を過去から未来へ向け変える時間軸の転換をする働きをもつ」と述べる。ここでは、そのような将来の物語を用いて、子どもが未来をまなざすことをうながしている。さらに、現在の苦しみを転換するためには、寄り添ってくれる他者の存在、意味の転換を導いてくれる他者の語りかけが必要であるため、グループIで語られたような信頼関係が重要となる。

(3)上位グループⅢ：持続可能な社会資源としての足場作り

このグループでは、子どもが施設を退所した後も継続して関わっていくために、どのような形で退所に向かうことが望ましいのか、また、子どもが退所した後、職員がどのような立場で子どもを支えていくべきであるかということについてのD先生の見解から構成されている。

⑥望ましい退所の形

D先生は、これまでのアフターケアの経験や、退所後の子どもと施設との関わりを鑑み、「一番大事なのは、卒業。高校卒業」と繰り返し高校卒業の重要性を強調し、望ましい退所のありかたを「(高校)卒業を、やっぱりして、ここ(B園)から、やっぱり『卒業おめでとう』って言って、『これから社会に出てがんばってね』みたいにみんなに言われて、出ていく形をとってほしい」というように語った。高校卒業と同時に施設を退所する子どもの多くは、施設で開かれる卒業式を通して、職員や他の入所児童に祝福されながら送り出される。この社会的慣習としての形式を整えた送り出し方は、子どもが施設を振り返る際にも、肯定的な施設生活のイメージを促進するため、退所後も持続可能な関係基盤への足場として機能するように思われる。子どもがいかに望ましい形で高校生活を終え次なるステップへと歩みだせるか、という点についてより高い関心が払われるべきかもしれない。

このような語りの背景には、施設児童の中には高校を中退することによって、措置が途切れてしまう子どもが一定数存在するという問題がある。インタビューで、D先生は、高校中退に伴いと施設を退所してしまったため、その後の支援関係を築くことが難しかった事例について語り、その経験から、子どもにとって退所後も持続可能な関係の足場とは何かを強く意識しているようであった。このような子どもへのセーフティネットを有効に機能させるため、社会資源が連携し、一貫して子どもを守りバックアップしていくという体制が必要である。このためには、ケースワークを専門にする職員の配置や、自立支援を担う専門職員の配置によって、このような子どもへの持続的で体系的な支援を可能にすることが必要である。

⑦こちらからは踏み込まないが、帰ってこられる場として

D先生は、子どもが施設を退所した後の支援について、「私は出た子を、ここから出て、どうしてるかなってというのは気になるけど、あえて自分からは絶対連絡しないって思ってた。だから、ここになるべく長くいて、ここに帰ってきて、『がんばってるよ』みたいな。『なつかしいな』って言うのを言えるっていうのが、私の考え」と語る。その背景には、「気になる子っていうのはたくさんいるけど、やっぱり、こっちから言ってもいいもんやろうか、どうなんやろうっていうところは、迷う」というためらい、「出てからのことって、その子その子の人生っていうか、生活があるので、私からは踏み込まない」と、それぞれの子どもの生活を尊重したいという思いがある。しかし、子どもにとって、施設がいつでも帰ってこられる場所としてあり続けるために、D先生ができるだけ長くB園にとどまり、受け入れられる存在であろうと展望している。村井(2002)は、退所者が、これまでの人間関係や生活環境から離れ、新しい課題にチャレンジしようとするとき、失敗したり、不安になることがあっても無条件に自分を受け入れてくれる場所を必要とすると述べる。退所者の自立を支えるためには、退所者が新しい生活環境の中で居場所の獲得することを支えるとともに、帰ってこることができる場所として、いわば自分を受け入れてくれる「ふるさと」のような場として施設を機能させていくことも重要である。

(4)上位グループⅣ：施設外部との関係

このグループは、リービングケア、アフターケアの双方に影響を及ぼし続ける、施設外部との関係性についての語りから構成されている。ここでは施設外部として、子どもの血縁家族や、子どもの支援を司る行政機関などが挙げられている。

⑧子どもなりのやり方で親とつながる

離れて暮らす家族の存在は、時に大きく子どもを翻弄する。施設児童の中には、親との関係の悪さが、B園でのいら立ちや葛藤とつながっている子や、親へと期待を寄せるものの、何度も裏切られ傷つく子どもも少なくないと語られた。家族アイデンティティの質は、過去の出来事の再構成し、前望的な語りを紡いで行こ

うとするプロセスにも影響する。

さらに、施設を退所した後、家族が子どもにとって頼れる存在となれるかどうか、子どもの自立に大きく関わるため、家族関係の修復という視点は自立支援においても非常に重要となると語られた。家族再統合への配慮に向けた援助は、国や自治体の責務としても位置付けられ、子どものみを保護し養育するという支援から、子どもとその家族に焦点をあてた支援への転換が求められている。ここでの家族再統合は、狭義に「家庭外措置にある子どもがその家族に復帰すること」のみを目指すのではなく、「同居、別居を問わず、不全状態に陥っていた家族機能が再生され、家族各構成員間の緊密で安定的な情緒関係が構築されること(才村, 2005)」を目指すべきである。筆者はこれまでの研究において、たとえ親子分離措置にあっても、親の存在は子どもへ重大な影響を及ぼすため、家族間の情緒関係の修復が児童養護施設の支援において必要とされていることを指摘してきた(高橋・やまだ, 2012)。結果的に家庭復帰が叶うか否かということよりも、あくまでも子どもが施設生活を送るなかで、肯定的な家族のイメージを持つことができるかどうかが大変であり、子どもや家族のもつ家族アイデンティティに配慮し、家族との関わりを重視する必要がある。

⑨他の社会資源との連携

行政機関との関わりは一貫して子どもの自立に影響し、入所中の自立支援計画の策定から、退所後のバックアップの枢軸としての役割を担う。その反面、行政からの支援が途切れてしまうこともあり得る。例えば、インタビューでは、高校を退学し、家族関係も改善されないままに施設を退所した少女の事例が語られた。この事例では、行政や施設が協力し、継続的な支援を行っていくことが望まれるにもかかわらず、結局行政からの支援が途切れてしまったという経緯がある。「(児童相談所から婦人相談所に相談に行くよう勧められたが)でも婦人相談所にしたら、まだ児童なので、児童相談所が見ればいいやんっていうような形になるのかなって。児相(児童相談所)の言い分は、本人が申し立てなかったら、相談として扱われないって。だから、児相のほうから(婦人相談所へ)もっていっても、成り立たないって」と言うように、高校を中退して社会に出た子どもについて、児童相談所と婦人相談

所という2つの管轄のはざままで支援からこぼれ落ちてしまうという事態が起こってしまったそうである。このような事態を防ぐためには、行政と施設が、「子どものために」という共通認識を持ち、時には役割分担をしながら協働していくことが必要であろう。

6 まとめ—自立支援の充実に向けて

D先生の語りから長期的な実践への意味づけを辿る中で、自立支援においては、子どもが自立に向かうために、それを支える支援者との関係性をどのように築いていくのが重要となることが明らかになった。「簡単に自立って言うんやけど、やっぱり出てから支えてくれる人とか、そういう人がいないなかで、一人が出ていってしまうっていうのと、やっぱり誰かがいるとか、自分にはこの人がいるんやっていうような気持ちがあつてとか、そういうのって全然違うと思うし。だから、そういう、『ああ、この人がいてくれるんや』って思ってくれるような関係を作れるようになって思ったり。困った時には、できることはやるよって」という語り表れているように、子どもが退所後にも、困難にぶつかった時、助けを求めることができる存在として継続的に子どもを支えることが、D先生の考える自立支援である。支援者との関係に根ざしながら、いつでも他者を頼り、帰ってこられる場所として施設を機能させること、さらに多様な社会資源にアクセスできるだけの道筋を子ども達に実践的に身に着けさせることなどが、今後必要になってくるのではないだろうか。

最後に、本稿で示されたD先生の自立支援についての語りから、子どもの自立への足場作りの鍵となる実践をまとめたい。第1に、対等性に基づく関係の構築である。そのことが、パターンリスティックで一方向的な支援から、子どもの主体性に基づく協働への転換を促す。第2に、ライフイメージの転換を促す語りを引き出すことである。子どもの過去の出来事への再構成は、子どもが現在の生を受け入れるために不可欠である。また、将来についても、茫漠とした将来展望が生き生きとしたものに転換することは、現在の課題への主体性を高める。職員が積極的に子どもの語りを聞き、時に様々なイメージを喚起させながらより肯定的なライフイメージを抱かせることが必要である。第3

に、望ましい形での退所の実現である。退所後に、子どもが施設を振り返るとき、子ども自身が望ましい形で送り出されたかどうかは、施設のイメージに多大に影響し、施設を頼ろうという気持ちをもてるかどうかを左右する。そのため、過度な心配や期待よりは、子どもの力を信じ祝福をもって送り出すことが持続的な関係基盤の重要な足場となる。第4に、他の社会資源との連携である。そのため、家族関係、行政との関係、あるいは本稿では示されなかったが、学校との連携も欠かせない。

施設児童にとって、依存から自立への移行は、一般家庭の子どもと違い、短いスパンで行われ、また支援の乏しい孤独なものになることが多い。そのため、急激な社会的移行において自らの主体性を発揮できたかどうか、退所後の生活に大きく影響するだろう。子ども達が、不可抗力的に押し付けられる制度や、世間的な価値観の中で、流されてしまうのではなく、主体的に自分の将来をつかみとろうとする姿勢をもてるかどうか、自立支援の課題となるだろう。

【参考文献】

- Biehal, N., Clayden, J., Stein, M., Wade, J.(1995). *Moving On: Young people and Leaving Care Schemes*. London : HMSO.
- Dixon J (2008). Young people leaving care: Health, well-being and outcomes. *Child & Family Social Work*. 13(2), 207-217
- 林浩康(2004). 児童養護施策の動向と自立支援・家族支援—自尊感情の回復と家族との協働. 中央法規出版株式会社.
- Jansen, A. and Andenæs s, A (2011). Heading for Japan': Prospective narratives and development among young people living in residential care. *Qualitative Social Work*. 10(4). 1-16
- 川喜田二郎.(1967). 発想法—創造性開発のために. 東京 : 中央公論新社.
- 北川清一(2010). 児童養護施設のソーシャルワークと家族支援—ケース管理のシステム化とアセスメント方法. 東京 : 明石書店.
- 村井美紀(2002). 「自立」と「自立支援」. 村井美紀・小林英義(編). 虐待を受けた子どもへの自立支援. 東京 : 中央法規出版.
- 野口裕二(2005). ナラティブの臨床社会学. 東京 : 勁草書房.
- Ryan, T., Walker, R. (2007). *Life Story Work—A Practical Guide to Helping Children Understand Their Past*. London : British Association for Adoption and Fostering.
- 才村純(2005)子ども虐待ソーシャルワーク論—制度と実践への考察. 東京 : 有斐閣.
- Stein ,M (2006). Research review: Young people leaving care. *Child and Family Social Work*. 11 273-279
- 高橋菜穂子(2012). 「児童養護施設における自立支援の取り組み—年長児童 2 名と職員の関係性の変容」. 『京都国際社会福祉センター紀要, 発達・療育研究』. 京都国際社会福祉センター. 19-32
- 高橋菜穂子・やまだようこ(2012). 「児童養護施設における支援モデルの構成—施設と家庭をむすぶ職員の実践に着目して」. 『質的心理学研究』. 11. 156-175. 東京 : 新曜社.
- やまだようこ (2003). 「フィールドワークと質的研究法の基礎演習 : 現場 (フィールド) インタビューと語りから学ぶ『京都における伝統の継承と生成』」. 『京都大学教育学研究科紀要』. 49, 22-45.
- やまだようこ(2000) 喪失と生成のライフストーリー—F1 ヒーローの死とファンの人生. やまだようこ編. 人生を物語る—生成のライフストーリー. 京都 : ミネルヴァ書房.

(博士後期課程・日本学術振興会特別研究員)